

関西学院大学 研究成果報告

2019年 3月 31日

関西学院大学 学長殿

所属：総合政策学部
職名：教授
氏名：山中速人

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	「生活者におけるナラティブの記録と分析のためのデジタル映像技術の活用～トルコ地震／災害経験者における「生活の語り」の記録と分析～」
研究実施場所	トルコ共和国（イスタンブル、コジャエリ、イズミット、フェティエ）ほか
研究期間	2018年 4月 1日 ～ 2019年 3月 31日（ 12ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本研究の問題関心は、以下のようなものであった。

震災や被爆などの特異体験やライフストーリーに関する当事者のナラティブ・リコーディングを包括的に記録し集積する試みが、近年、大きな進展を示している。この問題関心を中心とし、かつ、災害被災者の口述の記録研究について関心と蓄積の乏しい中東地域の中から比較的对象者へのアクセスの容易なトルコ共和国をフィールドに選んで、被災者の口述記録研究の先駆的な試みを進めるものである。

貴重な特別研究期間をつかって、上記の研究課題への接近をより多元的に行うために、研究テーマをより広く「負の歴史の記憶の方法の調査研究」に設定し、関連する諸外国における「負の歴史」に関する記憶の試みについて、フィールド調査を実施した。

よって、調査期間、調査対象地域は、当初の予定を超えるものとなった。調査期間は2018年5月下旬から8月上旬の期間であり、また、訪問対象地域は、ドイツ、トルコ、タンザニアであった。

主な訪問機関は以下のとおりである。ナチス記録センター（ケルン、ドイツ）、ハインリッヒ・ハイネ大学（デュッセルドルフ、ドイツ）、ドイツ現代史博物館（ボン、ドイツ）、イスタンブル大学（イスタンブル、トルコ）、歴史民俗博物館（フェティエ、トルコ）、地震博物館（サカリヤ、トルコ）、コジャエリ大学（イズミット、トルコ）、マルマラ地震被災地（ギョルジュク、トルコ）、タンザニア国立博物館（ダルエスサラーム、タンザニア）、野外民俗博物館（ダルエスサラーム、タンザニア）、キャラバンサライ博物館（バガモヨ、タンザニア）、奴隷貿易博物館（ザンジバル、タンザニア）。

訪問調査の行程としては、まず5月下旬に日本を立ちドイツでの調査を皮切りに、6月中旬にトルコに移動

し、さらに、6月旬からタンザニアに移動し、ダルエスサラームからバガモヨ、そして海路でザンジバルに移動し、7月上旬からふたたびトルコに移動し、フェティエに滞在の後、イスタンブルに移動し、そこを拠点に、マルマラ地震の被災地であるヤロワ、イズミット、ギョルジュクでの調査を実施し、8月上旬に帰国した。

これら調査研究によってもたらされた成果は以下のようなものである。

1. まず、本特別研究その中心課題であったトルコにおける地震被災者の被災体験の映像記録と分析に関しては、次の研究論文を発表した。

○山中速人、井藤聖子「マルマラ地震（1999・トルコ）被災者の「語り」の口述記録調査のエスノグラフィー～トルコにおける災害の集合的記憶の伝承をめぐる～」『総合政策研究』第58号（2019年3月）pp. 1-18.

その概要は、つぎのとおりである。

概要：1999年8月17日にトルコ共和国コジャエリ（Kocaeli）県イズミット（İzmit）市付近を震源とするマルマラ地震が発生した。今年2018年は、この地震が発生して19年目である。この地震の被災者たちが、どのように地震の記憶を継承しているのかを明らかにするためインタビュー調査を行なった。

被災者自身の口述記録は、将来の防災のために重要であるだけでなく、伝承文学研究や社会史研究においても、高い学術的価値が認められている。マルマラ地震の被災者自身の経験を口述記録するため、その被災地であるギョルジュク（Gölcük）を訪問し、被災者の「語り」を映像と音声で記録した。本論文は、その調査過程と結果をまとめたものであり、さらに、当事者の「語り」がトルコの学術研究においてもつ位置づけについての考察も行なった。

調査で分かったことは次のとおりである。被災者たちは、彼ら自身の個別的経験を語ることに、きわめて積極的であり雄弁であった。彼らの「語り」が、それを聴く者の感情を揺さぶり、共感を起こすということを考えれば、それを口承文芸や話芸の一つの形態として理解することが可能である。トルコ社会において、この当事者の「語り」とその記録の重要性が今後さらに広く認識されることが期待されている。

2. ドイツでは、科研費の補助を得て研究を続けてきたトルコの街頭景観に現れたイスラム表象の分析研究の関連研究として、デュッセルドルフのトルコ人集住地区において同じ調査手法を用いて調査を実施し、その結果を論文として発表した。

○山中速人、井藤聖子「デュッセルドルフ（ドイツ）のトルコ人集住地区の街頭映像に現れた宗教／エスニック表象に対する社会学的分析の試み～都市におけるムスリム移民の生活文化と宗教的表象についての考察～」『コミュニケーション科学』第49号（2019年2月）pp. 43-62.

3. ドイツで実施した、ナチス記録センター（ケルン）とドイツ現代史博物館（ボン）での訪問調査については、以下のネット配信番組でその成果を公開している。

○「負の歴史の記憶をたどる旅 ドイツ編」<http://myticket.jp/movie/7759>

出演：山中速人、聞き手：山田和生

ネット動画配信局「もう一つの旅のフォーラム」のオンデマンド動画番組

4. タンザニアにおける植民地と奴隷貿易に関する負の歴史経験の記録の方法についての調査研究については、以下のラジオ番組として、その成果を公開した。

○エフエムわいわい（神戸、長田）のラジオ番組

「世界の街角で多様性について考える旅 その1 ザンジバル（アフリカ・タンザニア）で考えた加害/被害を越える道」2019年1月26日放送

出演：山中速人、聞き手：金千秋

以上

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。